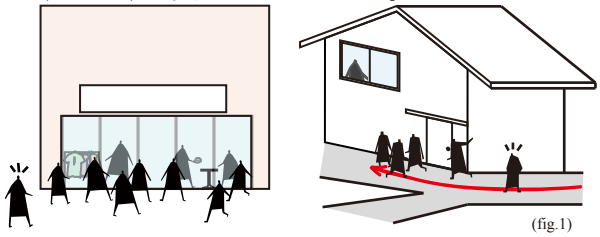
アクティビティがつくる建築

指導教員　　吉松秀樹教授　　印　　0BEB1233　白井　由惟

01. 人の動きによる活動

場所や土地に認識がなくても人の動きで方向を認識したり、店に人が集まっているから寄ってみたり、人が集まることにより生まれるアクティビティに興味を持った (fig.1)。



(fig.1)

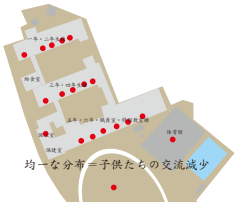
02. 自発的なアクティビティは生まれるのか

従来の小学校は、クラスごと部屋が仕切られ、空間に閉じこまり、教室に入ったらおもわず黒板に集中してしまうような空間に感じる。また、移動だけの廊下が存在し、機能は良くてもアクティビティは少なく、豊かな生活が失われいる (fig. 2)。

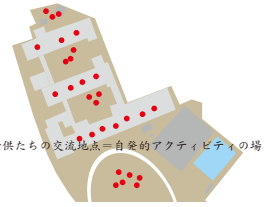
(fig.2)

03. 小学校の分布

子供たちは使われる範囲はある程度決められており新しい発見を感じる場が見つけられない (fig.3)。休み時間には、自分のお気に入りの場を見つけ遊ぶ。そこには、自発的な活動の場が存在している (fig.4)。授業内でも、クラス単位に分けることなく多くの人と関わりを持たせることにより、アクティビティを生む。また、開かれた空間だけでなく隠された死角のような空間をつくることにより、子供たちの動きが誘発される。開かれた空間と死角空間を組み合わせ広げていくことにより学校全体の繋がりがうまれる。



授業中 (fig.3)



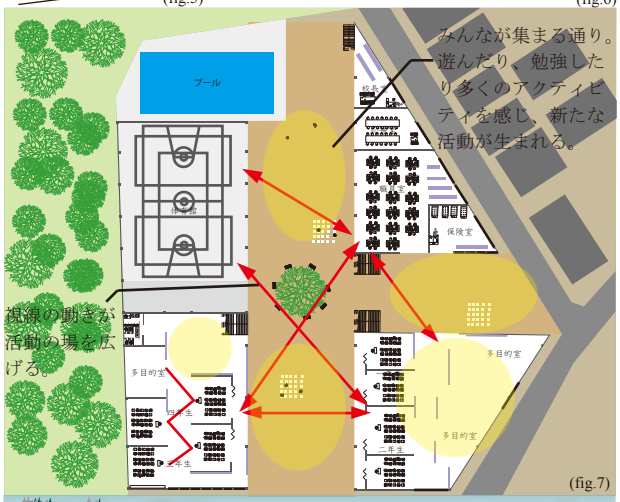
休み時間 (fig.4)

04. 提案

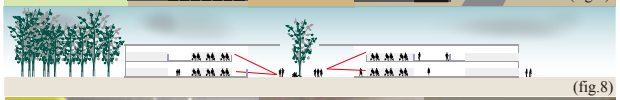
廊下は移動手段のものだが、そこに本をおけば図書館になるかもしれない (fig.5)。教室も同様に人が集まるだけだけで教室に感じる。そこで、空間の機能制限を無くすことによる、自発的な活動の場を提案する (fig.6)(fig.7)(fig.8)(fig.9)。

(fig.5)

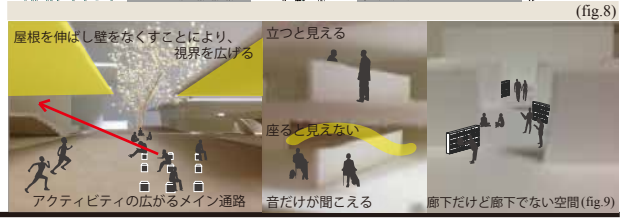
(fig.6)



(fig.7)



(fig.8)



(fig.9)